

地域連携・国際センター一年報

Ⅰ 認定看護管理者教育課程（サードレベル）報告

1 サードレベル実施概要

2019年度は、サードレベルの教育課程を開講した。

(1) 日程：第1クール 2019年6月20日（木）～7月6日（土）

第2クール 2019年7月16日（火）～8月2日（金）

第3クール 2019年8月29日（木）～9月6日（金）

(2) 受講者 18名（県内 14名、県外 4名）

（看護部長職 3名、副看護部長職 9名、看護師長職 6名）

(3) 内容：

- ・カリキュラムは、「ヘルスケアシステム論Ⅲ」、「組織管理論Ⅲ」、「人材管理Ⅲ」、「資源管理Ⅲ」、「質管理Ⅲ」、「統合演習Ⅲ」の6つの教科目からなる。時間数は規定の180時間のほかに、ヒューマンネットワークング、情報収集・文献検索方法、図書館オリエンテーション、プレゼンテーション等15時間を加え、計195時間であった。
- ・講師は、県内外の専門分野の教育・研究・実践者が担当し、学内教員の協力も得た。
- ・学習方法は、成人学習者として主体的に展開することを目指し、講義、演習、実習、プレゼンテーションにより構成した。

2 サードレベルフォローアップ研修

(1) 目的：認定看護管理者認定審査を受験することを推進し、認定審査に向けて準備並びに情報交換を行うことを目的とする。

(2) 内容：認定看護管理者認定資格を受験した先輩の体験談、受験傾向と対策及び小論文の練習

(3) 開催日時：2020年1月25日（土）13:00～16:30

(4) 場所：青森県立保健大学 C棟2階 N講義室1

(5) 参加者：令和元年度サードレベル修了者 18名、協力者 2名、専任教員 1名、本学教員 1名
計 22名

II 研修科事業報告

2019年度の研修科事業の概要

1 公開シンポジウム「地域包括ケア・フォーラム in 青森 2019」

1 企画の背景

本フォーラムは、平成13年に下北地域の保健医療福祉専門職と共同で「ケア・マネジメントフォーラム in 下北」と題し企画開催された。翌年からは、「ケア・マネジメントフォーラム」の名称を用いて毎年開催を重ね、平成26年度からは「地域包括ケア・フォーラム in 青森」として開催し、これまで広く県下の保健医療福祉専門職、当事者・家族、本学教職員・学生の参加を得ている。これまで高齢者虐待・利用者が望むケアプラン・地域におけるすこやか力向上、がん患者のためのサバイバーシップ、排泄ケア等、地域のニーズに対応した多岐にわたるテーマで開催してきた。

2 開催目的

2018年度は「日常生活上のケアをする」という基本に戻り、中でも”排泄ケア”に着目した。2019年度も引き続き、日常生活上のケアに視点を置き、”口腔ケア”に焦点を当てる。私たちが生活する上で不可欠な行動であり、重要なテーマである。口腔ケアは、口の中を単にきれいにするだけでなく、食行動や会話、誤嚥予防にもつながるケアである。あらためて、日々のケア方法がより効果的なものになるための工夫を得る機会としたい。

3 参加者

県内保健医療福祉職他：113名

4 開催日時及び会場

令和元年11月19日（火）13:00～15:30

青森県立保健大学 A棟1階A101教室

5 内容及び講師等

フォーラム・ディスカッション

司会：青森県立保健大学 看護学科教授 鄭 佳紅

講師（演者）

①藤田医科大学病院 摂食・嚥下障害看護認定看護師 三鬼 達人氏

②株式会社スマイルタカラ 代表・歯科衛生士 天間 財子氏

③介護老人保健施設希望ヶ丘ホーム 言語聴覚士 井澤 ひろみ氏

6 成果及び評価

フォーラム終了後、アンケート調査を実施した。参加者113人のうち、95人（回収率84%）から回答をいただいた（詳細はアンケート結果参照）。講演の満足度は、「満足した」61%、「概ね満足した」37%、ディスカッションの満足度は「満足した」41%、「概ね満足した」39%であった。今後の職務に「大いに役に立つ」67%、「少しは役に立つ」28%で研修会の評価は概ね良好であったといえる。

2 研修企画・実施助成事業

県内の保健医療福祉専門職を対象とした研修企画を募集し、助成を行った。採択された研修企画・実施助成については事業実績報告書参照のこと。

3 社会福祉士実習指導者講習会

- (1) 目的：社会福祉士養成校として社会福祉士実習指導者を安定的に確保することが必要であることから、県内養成4大学が協力して実習先の安定的な確保を図るため
- (2) 対象者：県内の社会福祉士資格取得者 54名
- (3) 開催日時：2020年8月31日（土）10:00～18:00、2020年9月1日（日）9:00～17:15
- (4) 場所：青森県立保健大学 B棟1階 B110教室
- (5) 内容：社会福祉士を対象とした2日間の研修（実習指導概論、実習マネジメント論、実習プログラミング論、実習スーパービジョン論の4科目構成）
- (6) 講師：①青森大学社会学部 教授 田中志子氏
②八戸学院大学人間健康学科 准教授 小柳達也氏
③青森県立保健大学社会福祉学科 講師 宮本雅央氏
④弘前学院大学社会福祉学部 教授 小川幸裕氏

4 認定看護師フォローアップセミナー

- (1) 目的：認定看護師の役割を振り返ることや自己研鑽のため
- (2) 対象者：がん化学療法看護認定看護師（本学課程修了者）16名
- (3) 開催日時：2020年1月11日（土）13:00～17:00
- (4) 場所：青森県立保健大学 A棟1階 A107教室
- (5) 内容：テーマ「がん薬物療法を受ける患者の地域とのシームレスな療養支援」
講義及び事例検討
- (6) 講師：聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 看護部 師長
山下 まゆみ氏（がん化学療法看護認定看護師）

カウンセリングの新展開としてのフォーカシングと対人援助スキルの向上 ーインタラクティブ・フォーカシングの体験的理解（継続研修編）ー

岡田敦史¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

1. 企画の背景

この研修企画は、これまで「フォーカシング」の研修として助成を得て H28 年度は「入門編」、H29 年度は「中級編」として「インタラクティブ・フォーカシング研修会」を実施し、H30 年度は「初級から中・上級編」として実施した。

フォーカシングやカウンセリング等の対人援助スキルは、単発の研修会だけでは臨床や現場において十分に活用出来るものではなく、ワークショップ形式の研修会に継続的に参加しながら、資質の向上を図る必要がある。本年度は、過去 2 回以上の本講座参加者（中級者および上級者）に参加資格を限定し、20 人程度の小グループで研修をおこない、高度で集中的な研修会とする。

2. 研修目的

保健・医療・福祉・教育等の専門職に要求される対人援助スキルとして、「フォーカシング」を学習する。加えて、セルフケアスキルとしてのフォーカシングを身につけることや、フォーカシングを活用して対人援助職同士の協働を促進する能力を身につけることを目的とする。特に今年度は、高度で集中的な研修会を実現するために参加者を限定し、20 人以下のワークショップ形式とし、継続研修の効果を高める。

3. 研修受講者

職種：児童福祉施設長・生活指導員・心理療法士、特別養護老人ホーム施設長、特別支援学校教員、青森県庁職員、青森市立中学校教員、精神科病院心理士等

受講者数：修了者数 18 人（のべ参加者数 36 人）

4. 開催日時および場所

令和元年 10 月 2 日（土）から 10 月 3 日（日） 青森県立保健大学 B 棟

5. 研修内容

1 日目：インタラクティブ・フォーカシング・マスターティーチャー前田満寿美、同じく伊藤美枝子氏によるインタラクティブ・フォーカシングの理論・デモンストレーション・体験的学習。

2 日目：ワークショップ 2 日目は両講師の指導のもと、フォーカシング体験を中心としたグループセッション及び個別セッション。

6. 研修の成果および評価

研修参加者のアンケートでは、「参加目的は達成できた」は 10 名（59%）、「概ね達成できた」は 6 名（35%）であり、両者をあわせると 9 割以上の研修参加者は高く評価したことが示された。また、「職務に役立つか」の問いについては、「多いに役立つ」が 13 名（77%）、「少しは役立つ」が 3 名（18 %）とされており、社会的意義としても非常に高い評価であった。

7. その他（改善検討事項、特記事項など）

福祉（高齢、児童）・教育（一般教育、特別支援教育）・産業の分野から参加者があったが、医療・保健（看護、地域保健）分野からの参加者がなかった。

高齢者のスキンケア（基礎編・スキンテア編）

長内志津子¹⁾、木村ゆかり¹⁾、福岡裕美子¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部看護学科

1. 企画の背景

近年高齢者の「スキンテア」が問題視され、2018 年度診療報酬改定にて褥瘡の危険因子評価項目に「皮膚の脆弱性（スキンテアの保有・既往）」が加わった。一方で昨年実施した「高齢者のスキンケア（基礎編）」では、「スキンテア」を初めて知った参加者がほとんどであり、引き続き多くの専門職者が最新の知識・技術を知る機会が必要であると考えた。今年度は、「基礎編」に加え、スキンテアの予防・評価・創傷管理を主とした「スキンテア編」を設け、病院や介護老人保健施設を会場とし、系列施設や近隣施設等の専門職者を対象とした本研修を企画した。

2. 研修目的

- 1) 高齢者のスキンケア・基礎編：病院・施設等で高齢者の援助を行っている専門職（看護職、介護職、リハビリテーション職）者が、高齢者の皮膚に関する基本的知識とスキンケアの方法を講義・演習を通して修得すること。
- 2) 高齢者のスキンケア・スキンテア編（以下テア編）：「基礎編」受講者が、スキンテアの予防・評価・創傷管理方法を講義・演習を通じて修得すること。

3. 研修受講者

職種：病院・施設等に勤務する看護職、介護職、リハビリテーション職者、等

受講者数：基礎編 75 人、テア編 57 人、計 132 人

4. 開催日時および場所

あおもり協立病院 1) 9月4日、2) 9月5日 17:30-19:00

介護老人保健施設みちのく青海荘 1) 9月24日、2) 10月15日 17:00-18:30

青森慈恵会病院 1) 12月20日、2) 1月9日 17:15-18:45

5. 研修内容

- 1) 基礎編 講義（40分）、演習（45分）、まとめ（5分）
詳細は 2018 年度センター年報を参照ください。
- 2) テア編 （担当者 講義・まとめ：長内、演習：長内、木村）
講義（40分）①褥瘡危険因子の評価・皮膚の脆弱性、②創傷治癒のメカニズム
演習（45分）①STAR スキンテア分類システムを用いた評価、②分類別スキンケア
まとめ（5分）質疑応答

6. 研修の成果および評価

修了者は基礎編 75 名（看護職 56%、介護職 39%）、テア編 57 名（看護職 65%、介護職 33%）、計 132 名であった。修了者の所属は、基礎編テア編共に自施設約 75%、その他約 25%であった。基礎編・テア編参加のきっかけ（複数回答）は「会場が勤務先」65%・49%、「テーマへの関心」47%・44%、「所属先の勧め」43%・33%が多かった。研修内容の理解は基礎編テア編共に 90%以上が「できた」「概ねできた」と回答し、研修目的も約 95%が「達成できた」「概ねできた」であった。職務へ役立つかは、基礎編テア編共に「大いに役立つ」「役立つ」がほぼ 100%であり、テア編は「大いに役立つ」が 82%と基礎編の 76%を上回った。基礎編テア編共に「症状の原因が分かった」「正しいスキンケアが分かった」、さらにテア編では「分類・評価・ケア方法が分かった」といった感想から、本研修が新しい知識や援助技術を身に着ける機会となっていた。一方で病院以外の専門職者から「保湿剤・衛生材料にお金をかけられず残念」という意見が複数あり、施設や在宅では管理者や家族から費用対効果を含めた理解を得る働きかけも必要であることが示唆された。

令和元年度「医療通訳養成研修」

川内規会¹⁾ 小笠原メリッサ¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部看護学科

1. 企画の背景

本学の研修事業として4年間「医療通訳養成研修」を県内の医療者やボランティア通訳者、医療現場で通訳を経験した人などを対象に企画し実施してきた。参加者の希望をとりいれながら内容を改善し、「医療通訳」を理解してもらうことを目指し、通訳者、医療者、一般県民が経験できるように企画してきた。今年度は、通訳技術をのばしてもらうことを目的に、研修内容の修了範囲がわかるように整理したものを新たに企画した。厚生労働省が示す一般財団法人日本医療教育財団の「医療通訳育成カリキュラム基準」の標準テキスト「医療通訳研修」を利用し、演習内容は、診療科ごとに知識と情報が得られる形とし、グループ・ロールプレイを実施する。

2. 研修目的

青森県の医療の現場で活躍できるよう、通訳者を養成することが目的である。一般的な通訳業務と異なり医療という専門的な分野では、語学力以外にも医療分野の知識、通訳技術、倫理など多くの視点が必要になることを再確認してもらう。また実際の医療の現場で、医療者と外国人患者の双方を助けるべく、医療の通訳業務が円滑に実践できる力をつけ、将来的にサービスを提供できる人材の育成を目指している。

3. 研修受講者

受講者：医療関係者（医師、看護師、薬剤師、理学療法士）教育関係者（高校教員、英会話塾、日本語教育）ボランティア通訳者（青森市ボランティア通訳、県国際交流協会ボランティア通訳）など、20人（2日間のべ参加者38人）

4. 開催日時および場所

日時：11月9日、10日 9:00～17:00（10日9:00～16:30）

場所：青森県立保健大学A棟1F 107教室

5. 研修内容

研修講師：森田直美（全国医療通訳者協会代表理事/医療通訳者）、矢野亮佑（青森県三戸地方保健所保健医長）、川内規会（青森県立保健大学教授）、小笠原メリッサ（青森県立保健大学講師）

ロールプレイ協力者：マイケル・スミス、クリストファー・ホーン

講義内容：日本の医療通訳の概要、医療現場の現状と心構え、医療通訳倫理と最新情報

演習内容：通訳技術（クイックレスポンス）、通訳実践、ロールプレイ

グループワーク：体験の共有、継続的学習の方法

6. 研修の成果および評価

研修参加者アンケート（19名）では、【1. 参加目的の達成度】の平均は4.5で「体系的に勉強することができた」「医療通訳を取りまく様々な情報を得ることができた」「ロールプレイで実際の現場に近い形での英語が勉強できた。」など新しい情報と実践が評価されていた。【2. 今後職務に役立つか】では平均4.5で「職務に役立つ点と学習に役立つ点の両方があった。」「日頃の翻訳・通訳業務に生かせる。医療通訳の役割を務めるためにも大切なステップだった。」「医療通訳の役割や医療制度についての正しい知識を学ぶことができた。」など、医療者やボランティアで実践している通訳者から高く評価されていた。【3. 意見・感想】では、「来年度も引き続き実施していただきたい。」「とても有意義で楽しかった。今後も情報をいただけたらありがたい。」「このような研修の継続を強く希望する」「ぜひこのような試みが続いてほしいと願う。」と継続を期待する声が多かった。

Ⅲ 国際科事業報告

1 ナムディン看護大学との交流

I. 背景

昨年、ベトナム国ナムディン看護大学及びベトナム国立栄養研究所との相互交流を通じて学術と教育の向上を図ることを目的に、2018年9月24日に交流協定を締結したナムディン看護大学は2018年9月に栄養学科を設置し、第一期生15名が2年次に進級していた。今回は5名の栄養学科学生が2019年9月12日から14日までナムディンを訪れ、両国学生間の交流を行ったので報告する。

II. 実施経過

まず、栄養学科において、興味のある学生(2~4年生)を募った。希望学生には参加希望の理由、ベトナムで学びたいことについてのレポート提出、面談を実施し、最終的に2年生1名、3年生1名、4年生3名、計5名の学生を選抜した。渡航に先立ち、学生は英語での自己紹介の資料作成、グループワーク(GW)のテーマについて事前学習し、研修に備えた。また、訪問最終日には学生同士が自由に交流する時間を設け、その計画を両国の学生同士がEメールにより事前に相談・調整を開始した。ナムディン看護大学での初日、キャンパスを案内していただき、栄養学科の教室、看護学科学生の授業・実習風景、学生寮、食堂などを見学させていただいた。午後は、大学及び学科紹介等の後、両国学生が事前に準備した英語による自己紹介実施した。また、5つのグループに分かれて双方が準備してきた内容を共有、英語でのディスカッションを開始した(写真1・2)。



写真1：校内見学やパワーポイントを用いた英語での自己紹介 写真2：グループディスカッションの様子

2日目は、双方のプレゼント交換や集合写真撮影(写真3)の後、ベトナム国立栄養研究所の所長 Prof Tuyen、本学栄養学科教授吉池信男の講義を受けた後、前日に引き続き、各グループはディスカッション内容をまとめ、プレゼン資料(英語、ベトナム語)を作成し、発表した(写真4)。本学の学生は、英語での質問に対する応答を含めて、ナムディンの2年生と協力し、しっかりとした内容のプレゼンテーションを行うことができていた。



写真3：プレゼントの交換と記念撮影

写真4：各班の発表

3日目は、事前のメールによる打合せをもとに学生の自主性に任せ、ベトナムの学生がナムディンの名所を案内し、その歴史や市内の様子を楽しみながら肌で学んだ。さらに、本学教員・学生がお世話になったナムディンの先生方、学生さんたちを招待する形で「さよなら昼食会」を催し、帰国前のひと時をより親しく盛り上

がって楽しんだ（写真5）。



写真5：ありがとう昼食会の様子

Ⅲ. 注目点 ～今後に向けて～

本学の栄養学科の学生にとっては初めての海外研修であり、外国人との交流であったにもかかわらず、ベトナムの学生が日本に来たらどのようにしたらよいかと考えるくらいに、さらに交流を続けたい、もてなしたいという気持ちを強くもったことがうかがえた。また、ベトナムの食や文化に直接触れ、ベトナムの同年代の学生とじかに話をするにより、ベトナムの栄養を取り巻く様々な現状を実感し、それを自分のキャリアに反映させる、大学院への進学を含めて自分の将来を改めて新しい視点から考え始めたという学生もおり、短期間ではあったが直接交流することの意義が感じられた。このように、専門（栄養学）のより深い学びという目的の下で、ツールとして「英語」を使うことを通じ、英語学習に対する達成目標の設定と明確な動機付けを図ることもでき、異文化交流も体験することができた、たいへん有意義な交流であった。

（担当者：栄養学科 鹿内彩子）

2 国際科講演会

- 1 日時：2019年11月2日（土）13：30～15：00
- 2 青森県立保健大学 A棟1階 A112教室
- 3 テーマ：実体験が成長の糧となる —POCO A POCO あなたの一步を—
- 4 講師：大賀 佳子 氏 青森市出身。2年間青年海外協力隊員（JICA）としてホンジュラス共和国で保健師として活躍。地域包括支援センターなどで勤務したのち2016年から健康診断施設の産業保健分野で活躍中。
- 5 講演内容：

青年海外協力隊として、ホンジュラス共和国において2年間保健師活動の実践をもとに、「国際協力は必要か?」「POCO A POCO」「国際協力の現状」「それぞれの1歩」について説明いただき、自国・ファーストではなく、国と国とがお互いに協力し、ひとつの方向に向いて問題解決することの大切や、1人の100歩よりみんなの1歩ずつのほうがはるかに会社を強くすること、それぞれの地域の特徴を生かした取り組み1歩・1歩が世界を変えることにつながることを写真や動画などを用いて視覚的にもわかりやすい内容であった。

さらに講師の活動紹介ビデオ「あおり地球人～いのちを守る町の保健師」の動画視聴を通して、現地での活動状況を目の当たりにすることで、その土地の暮らしや文化を学び、それを通して自分の強みである専門スキルを発揮し支援していく視点も大切であることを考える機会となったようである。

- 6 参加者：70名
- 7 参加者のアンケート結果（一部抜粋）より：
 - ・ホンジュラスでの活動内容が、動画などを用いて語られていてイメージしやすく興味もてた。新たな

ことを知ることができ、とても良い機会になった。

- ・実際に体験した人の話を聞く機会は少ないし、ネットで調べたりするよりも説得力があり、海外へ行くことに興味が湧いた。
- ・普段の授業では聞けない話がたくさんあった。日本と海外の違いや考え方、国際協力について聞けてよかった。

アンケート回答者の全員が講演内容に「満足」で、約 9 割が「自分自身の将来に役立つ講演内容であった」と回答しており、満足度の高い企画内容であったと考える。また、今後も同様のイベントを望むとするニーズも高かったことから、参加者のニーズを考慮して企画内容を検討していきたい。



講演会の風景



ホンジュラスの民芸品の展示

(担当者：看護学科 田中栄利子)

3 国際交流講座

《開催日》令和元年 10 月 12 日（土）、10 月 13 日（日） 本学大学祭において実施

《場 所》青森県立保健大学 B 棟 1 階 講義室 B 4 (B109)

《テーマ》『考えよう！ 使う責任と海の豊かさ』

《内 容》1. 上映会 「SDGs達成に向けたJICAの取り組み（ダイジェスト版）」

「ポイ捨てゴミはどこへ行く？～海を漂うプラスチック～」

「プラスチックの海」

2. 展示

1) 本学教員の活動紹介

栄養学科教員 2 名の活動についてスライドショーで常時紹介。

2) 本学の国際交流に関する展示

2019 年 9 月にナムディン大学を訪問した様子をスライドで紹介。

3) SDGs 関連展示

①SDGsの紹介(4枚)、目標12と14(各1枚)の合計6枚のパネルをイーゼルで展示。

②目標ごとのサイコロの作成(展示)。

③関連する冊子の展示。

4) ゴミ関連展示

①世界のゴミ比較セット、リサイクルバッグ、環境問題セットなどの展示。

5) 紙ストロー体験

配布した紙ストローを使って実際に飲み物を飲んで体験いただいた。

《共 催》独立行政法人 国際協力機構東北支部(JICA 東北)

《来場者数》98 名（1 日目 41 名、2 日目 57 名 回収アンケート数より）

《アンケート結果の抜粋》

- ・参加者の年齢の構成は、「19～29歳」31名（31.6%）が最も多かった。
- ・面白かった展示を複数回答で質問したところ、「ゴミ関連等展示物」65名（66.3%）、「SDGs紹介」41名（41.8%）、「本学の国際交流に関する展示」27名（27.6%）、上映会26名（26.5%）、その他7名（7.1%）で、世界のゴミ問題や海洋汚染やSDGsに関する展示への関心が高かった。
- ・世界のゴミ問題や海洋汚染、国際協力について理解が深まったかを問う質問では、「とても深まった」53名（54.1%）、「やや深まった」43名（43.9%）、「どちらとも言えない」1名（1.0%）、「無回答」1名（1.0%）であった。尚、「よくわからなかった」、「わからなかった」の回答は見られなかった。自由記述では「環境問題に無関心になってはいけないと思った講座だった。」、「自分の生活の中でもできることはしたいと思う。」、「SDGsについてもっと興味を示してくれる個人や企業にも参加してほしいと思う。」、「紙ストロー体験が良かった。」などの意見が見られた。



—当日の会場の様子—

（担当者：社会福祉学科 齋藤史彦）

4 小学生対象国際文化交流

外国の子どもたちが遊んでいるゲームを体験し、海外の文化に触れることを目的して、令和元年7月26日（金）に第3回目の小学生対象国際文化交流が大学の体育館で行われました。29名の小学生が参加し、英語で外国人の先生たちと楽しく交流ができました。2時間で5つのゲームを体験できました（エッグスプーンレース、キックベースボール、ブルラッシュ、トンネルボール、氷おに）。今年はキックベースボールが一番人気のゲームでした。例年通り、ゲームの他に「オレンジ休憩」も体験できました。オレンジ休憩というのはオーストラリアに子どものスポーツイベントで休憩を取るときにオレンジを食べる習慣があります。30個のオレンジがあつという間になくなりました。オレンジ休憩はとてもヒットでした。

子ども達全員が「また参加したい」と答えしてくれました。他にも以下のコメントがありました。

- ・全部の遊びをもう一度遊びたいです。
 - ・外国のゲームは知らなかったなので、楽しかったです。
 - ・先生たちが優しくてゲームも楽しかったです。
- また参加した子どもたちの親からコメントは以下の通りです。
- ・日本とはちがう諸外国の習慣に触れられ、とても興味深い楽しい時間を過ごすことができた。
 - ・休憩時間にお菓子ではなくてオレンジというのもとてもいいです。おいしかったです。ありがとうございました。
 - ・異文化に触れながら思いきり身体を動かす機会は、他ではないので、来年もまた参加させたいです。
 - ・準備等毎年ありがとうございます。外国の方と触れ合う機会があまりないので、とてもいいと思います
 - ・ゲームで少しずつ緊張がほぐれていったのがよかったです。英語を習っていても、なかなか決まった所でしか話す機会がないので、このようなイベントで英語をもっと話すことができるとありがたいなと思いました。

・皆様のご参加ありがとうございました！



(6人の先生たちと29人の参加者)



(トンネルボールの様子)

(担当者:栄養学科 メリッサ小笠原)

5 English Café 2019

English Café was held on August 9th, 2019 during the annual Open Campus at Aomori University of Health and Welfare. The café provides prospective students with a chance to meet the English teachers and experience communicating in English as they would in the classroom. At this year's English café, participants could rotate between 4 TVs in the room and learn about what happens in English at AUHW.



(Participants watching the videos)



(Participants watching the videos)

The 1st TV showed all of the English teachers' profiles, the 2nd TV showed a video taken on a trip to Australia for English Communication, the 3rd TV presented AUHW students' PowerPoints that they made in class, and the 4th TV was a slideshow of posters used to advertise English TV lunch.

Drinks and snacks were served to participants while they watched. English teachers chatted with Participants and explained in more detail about each video. Participants had lots of questions, in particular about English Communication. We look forward to seeing some of the participants join the course in the future.



(English teachers)

(担当者:栄養学科 メリッサ小笠原)

IV 社会福祉研修実績

総括表

研修名	開催日程 (月/日)	研修日程 (日)	定員 (人)	受講者数 (人)	会場
社会福祉行政新任職員研修	4/25	1	60	13	青森県立保健大学
障害児・者福祉施設新任職員研修	5/10	1	160	142	青森県立保健大学
老人福祉施設新任職員研修	5/14	1	140	99	青森県立保健大学
新任保育士・保育教諭研修	5/16	1	160	122	青森県立保健大学
社会福祉施設職員経理研修（児童福祉施設）	6/27	1	100	50	青森県立保健大学
社会福祉施設職員経理研修（児童福祉施設以外）	6/28	1	130	64	青森県立保健大学
栄養・食育マネジメントセミナーⅠ（児童福祉施設）	7/4	1	150	153	青森県立保健大学
保育所セミナー	7/9	1	80	72	青森県立保健大学
栄養・食育マネジメントセミナーⅡ（児童福祉施設以外）	7/11	1	150	145	青森県立保健大学
社会福祉トップセミナー	8/17	1	200	67	青森県立保健大学
社会福祉施設職場研修担当者研修	8/21～8/22	2	40	44	青森県立保健大学
社会福祉施設中堅・指導的職員研修	8/28、9/3～9/4	3	30	42	青森県立保健大学
生活保護従事職員・査察指導員研修	9/10	1	30	2	青森県立保健大学
社会福祉施設看護職員研修	9/17	1	150	136	青森県立保健大学
子ども・家庭福祉担当職員セミナー	10/4	1	60	25	青森県立保健大学
新任保育士・保育教諭フォローアップ研修	10/10	1	160	69	青森県立保健大学
障害児・者支援セミナー	10/16	1	80	74	青森県立保健大学
高齢者支援セミナー	10/23または10/30	1	各30	16、10	青森県立保健大学
カウンセリング研修（初級Ⅰ）	10/24	1	60	58	青森県立保健大学
カウンセリング研修（初級Ⅱ）	10/25	1	30	44	青森県立保健大学
社会福祉援助技術研修	11/8または11/15	1	各30	27、16	青森県立保健大学
セーフティネットフォーラム	1/20	1	100	66	青森県立保健大学
社会福祉主事資格認定講習会	5/20～11/22 (実習6日間含む)	54	60	20	青森県立保健大学他

V 令和元年度公開講座実績

基本テーマ：生活と健康 年度テーマ：高めよう！ひとりひとりの健やか力 地域で支えるみんなの健康

回	月	日	曜	講 師	職 名	講 演 テ ー マ	参加者/年間	
1	5	25	土	大西 基喜	看護学科特任教授	知ろう！ 私たちを取り巻く生活習慣病と その予防法	275	
				吉池 信男	栄養学科教授			
				竹林 正樹	青森県上北地域県民 局地域連携部主幹			
2	6	8	土	反町 吉秀	看護学科教授	守ろう！ 子どもの安全 高齢者の健康と安全	24	
				小笠原メリッサ	栄養学科講師			
3	6	22	土	古川 照美	看護学科教授	育もう！ 子育てにやさしい社会	169	1,056
				佐藤 愛	看護学科准教授			
				沼田 久美	NPO 法人子育て応援隊コ コネットあおもり代表理事			
				橋本 歩	NPO 法人子育てオーダーメ イド・サポートこもも代表理事			
4	7	6	土	佐藤 秀一	理学療法学科教授	動いて得しよう！ 身体の構造と動作の仕組み	315	
				千葉 敦子	看護学科准教授			
5	7	20	土	大西 基喜	看護学科特任教授	試してみよう！ 学生たちが得た健やか力向上の知恵 感じよう！ しあわせ・健やか・こころの健康づくり	273	
				石田 賢哉	社会福祉学科准教授			
				チーム代表	健やか力向(ヘルスリテラ シー)向上サポート4チーム			